

岡安 勲

Interviewer

進研アドBetween編集長
長田雅子

フロンティア精神あふれる
北里イズムを受け継ぎ
次代を切り開いてほしい

北里大学は「生命科学と医療科学を学ぶ総合大学」を掲げ、「地球の未来につながる教育・研究」に取り組んでいる。「世界の変化に対応できるしなやかな人材を育てたい」と語る岡安学長に、大学がめざす今後の方向性を聞いた。

総合的視点が 新しい発見につながる

長田 2012年7月に学長に就任されましたが、これまでのご経験から、どのような力や考え方を学生に身に付けさせたいかをお聞かせください。

岡安学長(以下岡安) 私は長く病理学の教育・研究に携わってきました。大学を卒業した頃は、実はへき地医療に携わりたいと思っていました。しかし、ゼミでお世話になった先生から、現場に出る前に基礎医学を学んだほうがよいというアドバイスを受け、基礎医学のうちもっとも臨床に近い病理学の分野に足を踏み入れたのです。

大学院の先生からも重要なアドバイスを受けました。顕微鏡の世界とは別の自由な視点から病理を研究していけば、新しい発見があるかもしれないということです。以来、私は解剖などを通して病理学を追究することと同時に、患者自身と向き合うことを意識してきました。ミクロとマクロの世界、両方を大切にしてきたのです。

研究でいつも気をつけていたのは、ミクロの視点に偏り過ぎないことです。現在、医学では分子の世界で病理を究明しようという考え方が主流です。分子レベルの研究は大切ですが、人間の体はマクロとしての全体を見なければわからないこともたくさんあります。分析や研究の結果を患者の治療にどのように生かすか。木を見て森を見ずということにならないように、総合的な視点が大切です。

本学の学生には、総合的な視点を身に付け、ミクロとマクロのバランスが取れる人材に育ててもらいたいと思っています。

改革のキーワードは 食・環境・健康・医療

長田 北里大学は2012年に創立50周年を迎え、2014年には学祖・北里柴三郎博士が創立した北里研究所が100周年を迎えます。歴史の節目に当たって、打ち出したい大学像について教えてください。

岡安 今、世界には感染症の脅威や食の安全に対する不安、環境破壊など、深刻な問題が山積しています。これらを解決するために、食・環境・健康・医療の4つの視点から、教育・研究を推進していきます。

本学では「地球の未来につながる教育・研究」をスローガンとして、次の4つに力を入れています。

1つ目は「チーム医療」。治療には医師、看護師、検査技師や薬剤師などのチームにあたります。連携することの大切さを教えるために、学部を横断して医療系学部の学生がディスカッションや演習をしたり、附属病院で実習を行ったりする機会を設けています。

2つ目は「感染制御」です。この分野は、伝染病の診断・治療の基礎を築いた北里先生が研究所を開設したときからの本学の伝統であり、今後も感染症の予防と治療、そのための教育に力を入れていきます。

3つ目は「農医連携」です。食と環境と健康をテーマに、学部を超えて受講できる農医連携教育プログラムを開発しています。2013年には、教育・研究を統括する農医連携教育研究センターを設置して、農と医に関するクリエイティブな考え方や知識・技能を持った人材を育成したいと考えています。

4つ目は「臨床教育」です。本学には4つの特徴的な附属病院があります。高度専門医療も手掛ける総合病院、地域の病院、慢性疾患を主に扱う病院など、個々の特徴を生かして、高度で幅広い臨床教育を展開していきます。

学祖が大切にした 社会での「実践」

長田 掲げられた4つの実践フィールドを通じて、どのようなことを学生に学んでほしいとお考えですか。

岡安 本学の建学の精神は「開拓」「報恩」「叡智と実践」「不撓不屈」です。北里先生は61歳のとき、政府の方針に納得できず、長く勤めた国立伝染病研究所を退職し、私財を投じて北里研究所をつくられました。先生が大事にされたのは研究の成果を社会で実践することで、そのフロンティア精神が本学の基盤です。学生にはそのスピリットを北里イズムとして受け継いで、社会のさまざまな課題の解決を図り、新しい世界を切り開いてほしいと願っています。

育てたいのは、社会の変化に対応できる力を持ったしなやかな人材です。世界が変わるなら自分も変わる必要がある。学校においてもそうです。高校までは受け身の授業が中心でいわばパッシブな学びですが、本学では、責任を伴う自由の下でアクティブに学ぶ必要があります。そして、大学院や社会で必要になるのがクリエイティブな力です。

大学で学びが終わるわけではありません。サイエンスは日進月歩です。卒業後も学び続けなければ激変する社会に対応できず、世界との競争にも勝つ



おかやす・いさお 1944年生まれ。東京都出身。東京医科歯科大学大学院医学研究科博士課程修了。ウェインステート大学医学部免疫学・微生物学教室リサーチアソシエイト、東京医科歯科大学助教授、北里大学病院病理部長、同大学院医療系研究科長などを経て現職。専門は人体病理学、実験病理学、細菌学。博士(医学)。

ことはできません。自ら学び、自分自身を磨く自己学習・自己研鑽の習慣を学生時代に身に付け、学びの中で得た本学ならではの専門知識・技術、経験を生かして、社会で「実践」してもらいたいと思います。

その基盤となるのは教養教育です。中でも倫理観の涵養は大切です。本学では、一般教育は1・2年次が中心ですが、倫理系の科目は実習が始まる高学年で履修するほうが、より切実感をもって受け止められます。そのため、医療倫理を含む一部の教養科目については、高学年でも受講できるようにカリキュラムを改編する予定です。スキルを磨くだけでなく、患者への思いやりや医療従事者として守るべきルールをしっかりと身に付けた人材に育ててほしいと考えています。

他大学がまねできない オンリーワンをめざす

長田 節目の年を迎えられ、次の50年、100年を見据えた展望が必要になると思います。次代に向けてどのような施策を展開されるご計画ですか。

岡安 開学から50年を迎えて施設が老朽化し始めています。相模原キャンパスの附属病院や医療系学部の校舎の建て替えなどを予定しています。また、他大学との提携も活発にしたいと思っています。現在、海洋生命科学部が東京大学、東京海洋大学などと共同で海洋研究開発機構の調査船を使用するなど、施設や設備を共同利用する動きが始まっています。相互に補完し合えるところは、効率化を図っていきたく考えています。

大学のグローバル化も大きな課題です。これまでは学部ごとに国際交流に取り組んできましたが、2013年4月に国際部を設立します。今後は海外に留学する学生を全学的に増やすとともに、海外からの留学生を呼び込んでいきます。

本学は創立から50年間で7学部を擁し、卒業生数は8万人に達しています。しかし、少子化が進む今後の社会では、これまでのような拡大は望めないでしょう。北里イズムを土台として教育・研究の質を高め、他大学がまねできない「オンリーワン」の大学をめざしたいと考えています。